

『古文真宝』後集 卷三「滕王閣序」における漢籍引用の様相 ——王勃に関連する部分を中心に

林 美 江

中国文学専門 博士前期課程 2年

1. はじめに

日本中世禅林では中国から輸入された多くの書物に目を通していたことが、芳賀幸四郎氏により、禅僧などの日記をもとに明らかにされている¹⁾。それは、杜甫、蘇軾、黄庭堅などの詩人の別集も例外ではなく、講義がなされ、抄物（注釈書）も作成された²⁾。報告者は、先行研究で断片的にしか取り上げてこられなかった初唐の詩人である王勃の「滕王閣序」に対する五山禅僧の認識について研究している。「滕王閣序」とは、『唐才子伝』³⁾巻一の王勃伝によると、王勃が父の見舞いに行く途中で南昌（江西省）を通りかかり、当時の都督（官職名）が滕王閣で宴会をしていたために、そこで書いた詩につけた序文である。

先に挙げた詩人の別集とは異なり、王勃の別集の場合、当時の禅僧がそれを身近に置くことは非常に難しかったと思われる⁴⁾。「滕王閣序」は、類書や『文苑英華』にも収められてはいるが、初学書⁵⁾であった『古文真宝』後集⁶⁾（巻三に「滕王閣序」を収録）を手にとることが多かったのではないかと考えられる。

そもそも、堀川貴司氏が指摘するように、「抄物作成の目的」は「漢詩文作成能力を強化するため、その方法と材料を提供することにあ」⁷⁾り、さらに「故事や人物・地名など、漢籍理解の基礎知識となるような事柄について幅広い知識を与えようとする時、もとの注釈以外の参考書を利用して説明していく」⁸⁾という抄物独特の性格がある。報告者が、五山禅僧の「滕王閣序」に対する認識について研究していく中で、禅僧が王勃や「滕王閣序」に関する記述を、『古文真宝』後集以外の漢籍でも読み、抄物に記していったという背景があることを忘れてはならないだろう。

本稿では、『古文真宝』後集、巻三の「滕王閣序」の抄に見える漢籍引用の様相を明らかにする。それにより、抄物に関わった禅僧が、王勃や「滕王閣序」に関する知識をどのような書物から得ていたのか、その読書範囲を明らかにすることができ、当時の禅僧が見ていたと思われる版本にできる限り近いものを用いて

出典を確認することで、さらに明確に提示する。

なお今回は、何種類かある『古文真宝』後集の抄物のうち、特に市立米沢図書館所蔵『古文真宝後集抄』を研究対象とした。その理由として、以下の二点を挙げる。

- ① 『古文真宝』後集は講義もされており、抄物も何種類か作成され、特に笑雲清三の抄物は、その前にできていた四つの抄（桂林徳昌・湖月信鏡・一元光演・万里集九）が一端まとめられた形になっている⁹⁾。柳田征司氏も指摘している¹⁰⁾ように、市立米沢図書館所蔵『古文真宝後集抄』は笑雲清三が作成した抄物と同系統である。
- ② 市立米沢図書館所蔵『古文真宝後集抄』は、題下に長い抄を付して、作者や作品に関連する記述を引用している。（今回は、この部分を「王勃に関連する部分」とタイトルに称して、本文注釈部分と区別した。）書名や巻数まで丁寧に書かれている場合が多いが、省略して書かれている場合もある。それは「滕王閣序」の抄の部分でも同様であり、その部分をもとに出典を確認することで、当時の禅僧が、どのような漢籍を読んでいたのかを確認することができる。

以上により、市立米沢図書館所蔵『古文真宝後集抄』が、本稿テーマにおける研究対象としてふさわしいと考えた。

2. 調査概要

今回の調査は、8月30日に市立米沢図書館、9月15日に国立公文書館、9月16日に東洋文庫・前田育徳会尊経閣文庫で閲覧調査を行った。

市立米沢図書館では、抄物の内容調査のため『古文真宝後集抄』（十巻、二十一冊、一五八八年写、請求番号：米沢善本139、管理番号：AA139001）を閲覧し、また出典確認のため、五山僧が用いた類書である『新編古今事文類聚』（明刊本、請求番号：米沢善本57、管理番号：AA057001）を閲覧した。国立公文書

館では、出典確認のため、詩話である『詩人玉屑』（明刊本、(明)嘉靖六(一五二七)年、請求番号：363-0100)を閲覧した。東洋文庫では出典確認のため『邵氏聞見後録』（国立北平図書館旧蔵明鈔本の影印、請求番号：LC-R-508)をマイクロフィルムにて確認したが、残存一五巻(巻一六～巻三〇)であったため、今回抄物に引用されている部分は、現存する明鈔本では確認できないことがわかった。前田育徳会尊経閣文庫では出典調査のため(元)張肇(天啓)釈文・何如愚(晦夫)編校『附音傍訓古文句解』乙集(元版

の紙焼き帖)(以下、『古文句解』とする)を閲覧した。こちらは抄物に引用されている記述との一致を確認できた。

3. 漢籍引用

3-1 出典調査

王勃や「滕王閣序」に関連する記述を引用している部分で、どのような漢籍を引用しているかを表1にまとめた。

表1 漢籍引用の一覧(市立米沢図書館所蔵『古文真宝後集抄』による)

番号	抄物(僧名)	抄物での記述(※括弧内は報告者による補足)	書名(出典調査結果)	出処	参考書(堀川貴司氏)
①	梅(万里集九)	呂東萊唐書詳節八	(宋)呂祖謙『十七史詳節』のうちの『唐書詳節』	卷八,列伝「高祖二十子」の「滕王元嬰」	
②	梅(万里集九)	新唐列傳宋祁所編第四(※「宋祁所編」は小字)	(宋)歐陽脩・宋祁『新唐書』	卷七九,列伝第四,高祖諸子	
③	梅(万里集九)	方輿勝覽十九,洪州部	(宋)祝穆『四六必用方輿勝覽』	卷一九,隆興府	○
④	梅(万里集九)	図絵宝監二,唐部	(元)夏文彦『図絵宝鑑』	卷二,唐	
⑤	梅(万里集九)	画譜	(撰人不詳)『宣和画譜』	卷一五,花鳥一,唐	
⑥-1	梅(万里集九)	山谷第七,顯劉將軍雁詩	(宋)黃庭堅『山谷詩集注』	卷七「題劉將軍鴈」詩(七言絶句の一句目)	
⑥-2		任天社注	(宋)黃庭堅『山谷詩集注』	同上詩の注	
⑦	梅某(万里集九)	(⑥-1の書物からの部分的な引用と⑥-2の注からの引用があり、『新唐書』を参照し、その内容を問いただそうとしているようである。今回は省略する。)			
⑧-1	梅(万里集九)	玉屑第十六,王建部(※書名のみで本文引用なし)	(宋)魏慶之『詩人玉屑』	卷一六「王建」の「摭実」(文末に小字で「西清詩話」とあり)	○
⑧-2		漁隱後集三十三(※書名のみ)	(宋)胡仔纂集『苕溪漁隱叢話』	後集卷三三に許彦周詩話の引用あり	○
⑧-3		許彦周詩話(※書名のみで本文引用なし)	(宋)許顛『許彦周詩話』→(宋)左圭編『百川学海』所収		
⑨-1	梅(万里集九)	才子伝	(元)辛文房『唐才子伝』	卷一	○
⑨-2	梅(万里集九)	唐書本伝	(宋)歐陽脩・宋祁『新唐書』	卷二〇一,文芸列伝上,第一二六	
⑨-3	梅(万里集九)	呂東萊唐書文芸伝	(宋)呂祖謙『十七史詳節』のうちの『唐書詳節』	卷五四,文芸伝「王勃」	
⑩	松(桂林徳昌)	(※書名なしで本文引用から始まる)	(元)辛文房『唐才子伝』	卷一	○
⑪	松(桂林徳昌)	容齋統筆載詩文当句対	(宋)洪邁『容齋統筆』	卷三「詩文当句対」	
⑫	松(桂林徳昌)	邵氏聞見録	(宋)邵博『河南邵氏聞見後録』	卷一五	
⑬	松(桂林徳昌)	楊誠齋 錦繡策	(南宋)楊万里『新刊盧誠齋楊万里先生錦繡策』		
⑭	松(桂林徳昌)	韻語陽秋 四	(南宋)葛立方『韻語陽秋』	卷四	
⑮	松(桂林徳昌)	韓文十三	(唐)韓愈『新刊五百家注音辯昌黎先生文集』	卷一三「新修滕王閣記」の本文の一部と注	
⑯	松(桂林徳昌)	古文句解 注	(元)張肇(天啓)釈文・何如愚(晦夫)編校『附音傍訓古文句解』	(乙集)卷七「滕王閣序并詩」の注	
⑰	松(桂林徳昌)	摭遺新説 所載,羅隱 中源水府伝	※出典は不明。これと類似した内容を載せているのが、次の書物。(撰人不詳)『分門古今類事』	卷三,異兆門上,「王勃不貴」(文末に小字で「羅隱中元伝」と出典を示す)	

※		摭言（※抄物には僧名の記載なし）	（宋）祝穆『新編古今事文類聚』	前集卷一一，九月，古今事実，「作滕王閣」（文末に小字で「摭言」と出典を示す）	○
---	--	------------------	-----------------	--	---

- 凡例
- この表で「抄物」と示したのは、調査対象とした市立米沢図書館所蔵の『古文真宝後集抄』のことを指す。
 - 抄物の形式として、最初に禅僧の略称（今回の場合は「梅」「松」）が記され、どの禅僧が抄を書いたかわかるようになっている。
 - 「抄物での記述（※括弧内は報告者による補足）」の抄物本文は、異体字なども断わりなく常用漢字に直した。
 - 表に載せた順番（①，②……）は、抄物に出てくる順番と変えてはいないが、書物の引用ではないと思われる箇所は飛ばしている。主に行を変えて次の書物を引用し始めた際に、次の番号に変えている。⑥-1，⑥-2とは、「梅」（万里集九）の抄が、行を変えずに続いている場合に用いている。
 - 表の番号の最後に「※」と付したが、⑰の後いくつかの抄を挟んだ後に『新編古今事文類聚』を引用したこの抄が見え、この抄だけ①～⑰の抄から離れた箇所にあるため、区別しやすいように「※」とした。
 - 出典は、できる限り当時の版本に近いと思われるものを影印本などを用いて確認するように努めたが、すべてにはできなかった。
 - 「出典調査結果の一覧」において【 】内に記した機関は、実際に閲覧のために赴いたところである。
 - 「参考書（堀川貴司氏）」の欄は、表の「書名」で挙げた書物を、堀川貴司氏が抄物で参考書として利用しているとして挙げていれば、「○」を記した。堀川貴司著『五山文学研究—資料と論考—』（二〇一一年，笠間書院），第一部総論・論考 第一章五山における漢籍受容—注釈を中心として—，七・八頁を参照。
 - 紙面などの都合上，抄物での引用が出典の本文の節録か否かや，文字の異同があるかなどまでは，今回は指摘しない。

▼出典調査結果の一覧

①	『十七史詳節』（日本宮内庁書陵部蔵宋元版漢籍選刊編纂委員会編『国外漢籍善本叢刊 日本宮内庁書陵部蔵 宋元刊漢籍選刊』第四十八冊（上海古籍出版社，二〇一二年），元版の影印。
②	『縮印百衲本 二十四史 新唐書』（商務印書館，一九五八年），〔静嘉堂文庫所蔵の北宋嘉祐（一〇五六～一〇六三）刊本〕の影印，闕巻は北京図書館江安傅氏双鑑楼所蔵の宋本で補ったもの。
③	『四六必用方輿勝覧』（全国高校古籍整理研究工作委員会編『日本宮内庁書陵部宋元版漢籍影印叢書』第一輯（綫装書局，二〇〇二年），〔南宋嘉熙三（一二三九）年原刻本〕の影印。
④	『函繪宝鑑』（（明）毛晋輯『津逮秘書』第七集，上海博古齋，一九二二年）
⑤	『宣和画譜』（（明）毛晋輯『津逮秘書』第七集，上海博古齋，一九二二年）
⑥	『山谷詩集注』（域外漢籍珍本文庫編纂出版委員会編『域外漢籍珍本文庫 日本五山版漢籍善本集刊』第四冊（西南師範大学出版社，人民出版社，二〇一二年），〔早稲田大学所蔵，覆宋紹定五（一二三二）年跋刊本〕の影印。
⑧-1	【国立公文書館内閣文庫所蔵】『詩人玉屑』（明刊本，（明）嘉靖六（一五二七）年，請求番号：363-0100）
⑧-2	『苕溪漁隱叢話』後集（『四部備要』集部，台湾中華書局，一九六六年，芸経楼仿宋本校刊）
⑧-3	『影宋本百川学海十集』第八冊（北京市中国書店），〔咸淳（一二六五～一二七四年）本左氏百川学海〕の影印。
⑨-1	『唐才子伝』（汲古書院，一九七二年），〔国立公文書館内閣文庫蔵の五山版〕の影印。
⑨-2	『縮印百衲本 二十四史 新唐書』（商務印書館，一九五八年），〔静嘉堂文庫所蔵の北宋嘉祐（一〇五六～一〇六三）刊本〕の影印，闕巻は北京図書館江安傅氏双鑑楼所蔵の宋本で補ったもの。
⑨-3	『十七史詳節』（日本宮内庁書陵部蔵宋元版漢籍選刊編纂委員会編『国外漢籍善本叢刊 日本宮内庁書陵部蔵 宋元刊漢籍選刊』第五十冊（上海古籍出版社，二〇一二年），元版の影印。
⑩	『唐才子伝』（汲古書院，一九七二年），〔国立公文書館内閣文庫蔵の五山版〕の影印。
⑪	『容齋統筆』五（『四部叢刊』続編子部の『容齋隨筆五集』，商務印書館，一九三四年）
⑫	『河南邵氏聞見後録』（（明）毛晋輯『津逮秘書』第十五集上，上海博古齋，一九二二年）
⑬	『新刊盧陵誠齋楊万里先生錦繡策』（四庫全書存目叢書編纂委員会編『四庫全書存目叢書』集部別集類，第十五冊（齊魯書社，一九九五～一九九七年），〔北京大学図書館蔵，万曆二（一五七四）年，李延楫刊本〕の影印。
⑭	『韻語陽秋』（『善本叢書』，上海古籍出版社，一九八四年），〔上海図書館蔵の宋刻本〕の影印。
⑮	『新刊五百家注音辯昌黎先生文集』（域外漢籍珍本文庫編纂出版委員会編『域外漢籍珍本文庫 日本五山版漢籍善本集刊』第一冊（西南師範大学出版社，人民出版社，二〇一二年），〔国立国会図書館蔵，嘉慶元（一三八七）年刊本〕の影印。
⑯	【前田育徳会尊經閣文庫所蔵】『附音傍訓古文句解』乙集（元版） ※ 確認したのは紙焼き帖。
⑰	（※類似の内容を載録）『新編分門古今類事』（『百部叢書集成』七六，十万卷楼叢書 第十二函，芸文印書館，一九六八年）
※	【市立米沢図書館所蔵】『新編古今事文類聚』前集（明刊本，米沢善本57，管理番号：AA057001）

以下に、出典調査結果の詳細の一部を述べる。

⑧-1の「玉屑」は『詩人玉屑』のことであり、「王建」の部であることまで丁寧に指摘しており、ここも一致する。⑧-1の抄に「詳見玉屑」とあるため、直前の⑦の抄と比較したところ、⑦の抄の一部は『詩人玉屑』を節録していることがわかった。

⑧-3の「許彦周詩話」は『百川学海』にも載録されているため、これを参照した可能性もあると考えたが、『苕溪漁隱叢話』後集卷三三を確認したところ、今回の作品に関連する内容は、『許彦周詩話』の引用箇所のみであることがわかった。そのため、『許彦周詩話』からの引用を『苕溪漁隱叢話』後集卷三三で確認していた可能性が高いことがわかった。

⑫の「邵氏聞見録」の出典を調べていた際、『河南邵氏聞見録』(=『河南邵氏聞見前録』)と『河南邵氏聞見後録』があり、今回引用されている部分は、実際には『河南邵氏聞見後録』に含まれていることがわかった。前章の調査概要でも述べたが、残念ながら東洋文庫所蔵の『邵氏聞見後録』(明鈔本(マイクロフィルム))には該当する巻が残っていなかった。

表1の「※」の「摭言」は、『新編古今事文類聚』に引用された「摭言」を参照していたと考えられる。『新編古今事文類聚』を指す書名は抄の中にみえなかったが、今回の抄で引用していた『新編古今事文類聚』の該当箇所の文末に、小字で「摭言」と出典を示していたため、おそらくこの記述を踏まえて、抄物では「摭言」と記して本文の引用を始めたと思われる。

3-2 市立米沢図書館所蔵『古文真宝後集抄』

表1に「参考書(堀川貴司氏)」の欄を設けたように、堀川貴司氏が五山僧の参考書として挙げている書物を、今回、研究対象とした抄でも多く参照していたことが改めて確認できた。

⑨-2, ⑨-3のように史書で王勃のことを確認するだけでなく、⑨-1, ⑩のように『唐才子伝』から王勃の伝記を引用している。さらに王勃が「滕王閣序」を書いたことから派生したと思われる逸話を、⑰と「※」で引用している。

滕王閣を建てた李元嬰に関する記述の引用もあることがわかった。①, ②のように史書で確認するだけでなく、④『図絵宝鑑』や⑤『宣和画譜』からの引用があり、李元嬰の画人としての一面も確認している。

「滕王閣序」本文に関連する記述については、⑪『容齋続筆』, ⑫『河南邵氏聞見後録』, ⑯『古文句解』(=『附音傍訓古文句解』)の注から引用している。特

に⑯の引用箇所は、「滕王閣序」に対する評価と関わりのあるものであり、後に詳述する。

このように、抄物はさまざまな書物の引用をしており、王勃という作者だけでなく、滕王閣を建てた李元嬰のこと、そして「滕王閣序」作品自体や序中の一部の表現に関する記述を引用していることがわかった。

4. 『古文句解』への着目

調査を進める中で、引用された書物の中でも、『古文真宝』後集の抄物の「滕王閣序」においては、特に『古文句解』注の内容が、『古文真宝』後集を講義していた禅僧、ないしは『古文真宝』後集の抄物に触れていた禅僧に着目されていたのではないかと推測されるような例がみえてきた。この章では、この点についてまとめたい。

ここで、まず『古文句解』について確認しておく。現在、日本で存在を確認できるのは、尊経閣文庫所蔵の(元)張肇(天啓)釈文・何如愚(晦夫)編校『附音傍訓古文句解』(元版と鈔本)のみだと思われる¹¹⁾。中国文学における様々な文章のアンソロジーであり、作品本文に注も付されている。収録する作品は『古文真宝』後集のものと重複するものもある。『古文真宝』後集の抄物では、作品の本文注釈で『古文句解』の注からの引用が多い。そして、今回取り上げている「滕王閣序」の部分では、作品への評価がうかがえる注が『古文句解』に付されていた。

【翻字】

愚謂、此序有四長。一長於張大形勢、二長於体状景物、三長於頓挫言辞、四長於賦詩。而未免有三短。全用四六駢麗、一短也。中間語意重複、二短也。鋪叙無倫、自叙太多、三短也。此其所以為唐文之初變。晚学妄議、識者鑑之。(尊経閣文庫所蔵『附訓傍点古文句解』乙集卷之七「滕王閣序」の注)

【訳】 私が考えるに、この序には四つの優れた点がある。一つめに、土地の様子を雄大に描写していることにおいて優れている。二つめに(滕王閣の周りの)様子や風景の描写において優れている。三つめに緩急の付け方において優れている。四つめに、詩の作成においても優れている。しかし、三つの欠点があることから抜け出せていない。すべて四六駢麗体を使っていることが、一つめの欠点である。中間

部分の語意が重複していることが、二つめの欠点である。叙述するにも順序もなく述べていて、自然と自叙（自分のことを述べている部分）の量が甚だ多くなっていることが、三つめの欠点である。その理由は、唐の文章で変化が生じたばかり時期のものであるからだ。（この意見は）至らない私の勝手な主張であるため、見識のある人に、この序の評価を見極めていただきたい。

この内容が、『古文真宝』後集を講義していた禅僧、ないしは『古文真宝』後集の抄物に触れていた禅僧に着目されていたと推測される理由は、以下のように三つある。

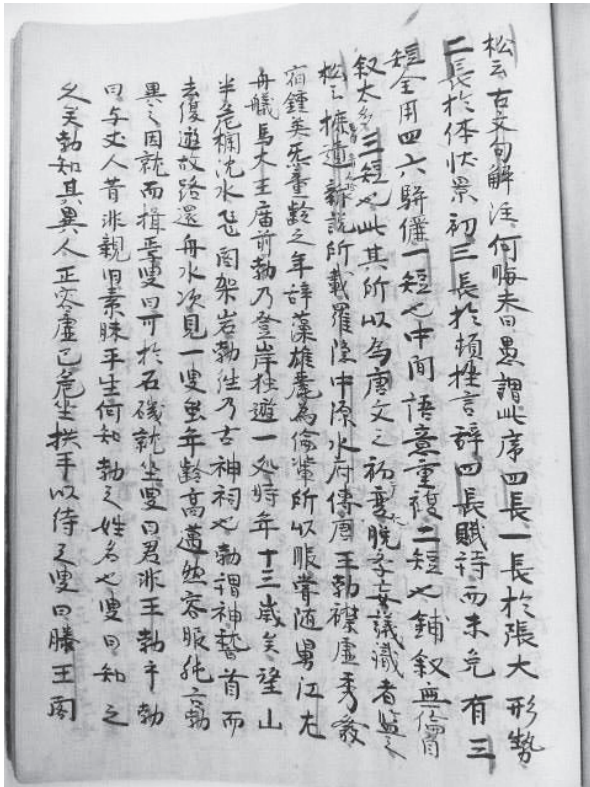


図1 市立米沢図書館蔵『古文真宝後集抄』（五冊目）より

4-1 単なる「四長三短」評の存在への言及

まず、次に挙げる二つの仮名抄から、『古文句解』の注の内容は「四長三短ノ評」として認識されていたことがわかる。

「一抄云、此序ニ、四長三短ノ評アルソ、……」（市立米沢図書館蔵『古文真宝後集抄』より）

（「滕王閣序」の後にある「滕王閣」詩の最後の句に

付された抄）「湖云、……（中略）……此序ニ、四長三短ト云、評カ、有ソ、……」（市立米沢図書館蔵『古文真宝後集抄』より）

『古文句解』の注では、「四長三短」という四字の熟語にはなっていないため、おそらく講義の中で通称のような形で使われていた表現だったのだろう。

また、市立米沢図書館蔵『古文真宝後集抄』（図1）にみえる『古文句解』注の引用箇所、「四長」・「二長」・「三長」・「四長」の左横に、また「三短」・「一短」・「二短」・「三短」の右横に朱線が引かれている。これは、長所と短所とで区別して朱線を引いていると思われる。

今回参照した抄物では、固有名詞や書名、元号、引用文などに朱線¹²⁾が引かれる。他にも、『古文真宝後集抄』の他の作品の抄では、作品を段落分けしている場合がよくみられ、その「第一段」、「第二段」などの左横に朱線が引かれていることもある。今回の「四長」「三短」などに引かれた朱線も、段落分けに引かれた朱線と似たような認識で、『古文句解』の注で「滕王閣序」の長所と短所を述べていることを、抄物を読む人にとって一見してわかりやすくするために引かれたものだったのだろう。また、「四長」・「三短」は固有名詞とは言えないため、やはり着目すべき事項として朱線が引かれたのではないだろうか。

4-2 「三短」評への反論

次に、『古文句解』の注の引用のみではなく、その内容を踏まえて書かれた抄物の記述が、今回取り上げている王勃に関連する部分の抄物にあることが確認できた。

「松云、以不二和尚科考之、……（中略）……自勃三尺一、自述也、此義為得也、然則免何晦夫三短之誚者乎、」（市立米沢図書館蔵『古文真宝後集抄』より）

【訳】 桂林徳昌が言うには、岐陽方秀和尚の取り上げる問題（作品の段落分け）に従って、この作品を考えてみると、……（中略）……「勃三尺……」（序の本文）から、自分のことを述べている。この考えは理に適っている。「勃三尺……」以降が自序であるならば、（『古文句解』の注で）何晦夫が述べていた「三短」（＝三つ目の欠点）の咎めから免れるのではないかと。

自序の始まる部分について、岐陽方秀の唱える説に従えば、『古文句解』の注で欠点と言われるほど自序の量は多くならないのではないか、という趣旨を含むものだろう。日本の禅僧の意見を踏まえて、『古文句解』の注の内容を吟味していることがわかる。

4-3 『古文真宝後集抄』以外での言及例

興味深いのは、「四長三短」を踏まえた記述が、『古文真宝』後集の抄物作成に関わっていない蘭坡景菴の作品集に見えることである。

達磨忌拈香（『雪樵独唱集』二）¹³⁾
 ……十月望上堂……（中略）……（而脱カ）重看画棟 △ 飛雲，諳滕閣三短之記。吾有幸耳，孰不慶之，仏殿修復後，

【訳】 ……十月十五日の上堂（法堂に上って法を説く）……（中略）……（王勃の詩には「画棟朝に飛ぶ南浦の雲」とあるが）彩色の施された棟にある、（風に吹かれ）飛んでいくかのような雲の模様を改めてじっくりみて、三つの短所があるという滕王閣の記を暗誦してみる。（彼の作品は）私にとってはありがたいものであって、誰が彼の作品に褒美も与えないでいようか、いやそんなことはない。（仏殿の修復後のこと）

このような例が一つしか発見できなかったことは残念だが、「滕王閣序」には四つの長所と三つの短所があるという認識の広がりや、抄物を作成していた禅僧のみにとどまらなかったと言ってよいだろう。

5. まとめ

今回の調査で、市立米沢図書館所蔵『古文真宝後集抄』巻三「滕王閣序」の抄物（題下注に該当する部分の抄）で、どのような書物が引用されているか、明確に示すことができた。また、今回の作品の場合は、引用された書物の中でも特に『古文句解』注に着目していた禅僧が一部いたと考えられることがわかってきた。

今後の課題は、『詩人玉屑』などの詩話の内容を讀

解することであり、禅僧の間で「滕王閣序」という作品に対してどのようなことが共有されていたのか、その内容を確認したい。また、「四長三短」と書かれた仮名抄の前後にも、「滕王閣序」に対する禅僧の認識が、いくつか見えることがわかったため、その部分の読解も進め、今後の研究成果につなげていきたい。

謝辞

今回の調査でお世話になりました市立米沢図書館・尊経閣文庫・国立公文書館・東洋文庫の皆様にご感謝申し上げます。また翻刻掲載などを快諾してくださった市立米沢図書館・尊経閣文庫の皆様にも重ねて御礼申し上げます。

注

- 1) 芳賀幸四郎著『中世禅林の学問および文学に関する研究』（『芳賀幸四郎歴史論集』三、一九八一年、思文閣）の第二篇中世禅林の文学、第二章大陸文学の鑑賞と研究、第二節詩集・文集を参照した。
- 2) 同注1)。
- 3) 『唐才子伝』（一九七二年、汲古書院）、〔国立公文書館内閣文庫蔵の五山版〕の影印。
- 4) 日本に王勃の別集が伝来してきていたことは、内藤湖南氏による指摘がある。内藤湖南「富岡氏藏唐鈔王勃集殘卷」（『内藤湖南全集』第七卷、一九七〇年、筑摩書房）、一〇九～一一四頁。内藤湖南「正倉院尊藏二舊鈔本に就きて」二、王勃集（『内藤湖南全集』第七卷、一九七〇年、筑摩書房）、一三七～一四一頁。その後の伝来についてははっきりしないが、少なくとも手軽に唐鈔本を見ることはできなかっただろう。
- 5) 堀川貴司著『詩のかたち・詩のこころ—中世日本漢文学研究—』（中世文学研究叢書十二、二〇〇六年、モリモト印刷）、第一章中世から近世へ、四〇一～四〇二頁。
- 6) 十卷、中国の宋代までのよく知られた文章を、文体ごとに分類して集めた書物。
- 7) 堀川貴司著『五山文学研究—資料と論考—』（二〇一一年、笠間書院）、第一部総論・論考 第一章五山における漢籍受容—注釈を中心として一、六、七頁。
- 8) 同注7)。
- 9) 同注1)。
- 10) 柳田征司「桂林徳昌講一元光演聞書『古文真宝抄』彦竜周興講某聞書『古文真宝抄』について」（大塚光信編『続抄物資料集成』第十卷、一九九二年、清文堂出版）。
- 11) 『尊経閣文庫漢籍分類目録』（一九三四年、侯爵前田家尊経閣）に見える。報告者は、元版の紙焼き帖にて確認した。
- 12) 一見してわかりやすいように、中央線（人名）、二重線（書名）、長い朱線、破線（他の書物からの引用部分）、右傍線（時代名・地名などの固有名詞）、左二重線（元号）、囲み（『古文真宝』所収作品の本文の一部）、小さい赤丸などと使い分けている。
- 13) 玉村竹二編『五山文学新集』第五卷（一九七一年、東京大学出版会）。